

日本の方言

3年B組22番 井原由依

I はじめに

私は小学生の頃から方言に興味がありました。興味をもったきっかけは違う県に住む親戚の子と話した事です。話していて「変だな」と感じたので「変わったしゃべり方やね」と言うと同じ言葉がかえってきました。そのことがきっかけで、私は「方言っておもしろいな」と思うようになりました。「方言はいつからあるのか」「なぜ方言が存在するのか」今回の卒業研究という課題は、私が方言について詳しく知るための良い機会になりました。

II 研究内容

1. 方言はいつ頃からあるのか

「万葉集」と方言

1000年以上前には、全国にさまざまな方言があったと考えられます。

今からおよそ1200年ほど前の奈良時代にできた「万葉集」という本の中には、「東歌（あずまうた）」とよばれる方言で書かれた和歌が載っています。

東歌には「東国（とうごく）方言」という関東地方を中心とする東日本の方言が使われていて、このころすでに東日本の方言と西日本の方言が大きく異なっていたことがわかります。

方言は「祖語（そご）」とよばれる先祖にあたる言葉が元になっていて、それが時代とともに様々な方言にわかれていったと考えられます。

現代の京都の方言と沖縄県那覇市の首里の方言は、今から1450年から1700年くらい前にわかれたと推定されています。

2. ことばの違い

(1) 東のことば 西のことば

方言は東と西で大きく異なり、その分布の仕方に決まった法則がみられることがあります。日本の方言の分布の仕方は、言葉によって様々ですが、その中で最も目立つのが東日本と西日本の違いです。

「しおからい」

東日本…ショッパイ

西日本…カライ

ショッパイとカライは二つに分かれて、日本の大部分に広がっています。

また静岡県の伊豆地方では、「しおからい」をショッパライと言います。

このショッパライは、そのまわりにあるショッパイとカライが混じり合ってきたものと考えられます。

(2) ことばの境界線

ショッパイとカライの境界線は、新潟県の西の端にある糸魚川（いといがわ）市と静岡県の西の端にある浜名湖（はまなこ）を結ぶ線上にあります。

この線は、「糸魚川・浜名湖線」と呼ばれ、日本の方言を東西にわける大きな境界線となっています。

つまり、本州の中ほどで新潟県、長野県、静岡県よりも東の地方と、富山県、岐阜県、愛知県よりも西の地方がおおきく分かれることとなります。

糸魚川の西には、難所として知られる「親不知（おやしらず）」があり、長野県と岐阜県の境には、日本アルプスの山々が横たわり、静岡県の西部には、天竜川や大井川などの大きな川が流れています。

これらの自然の壁が、人々の行き来を妨げ、言葉を東西にわける大きな原因となったと考えられます。

（3）西のことばと共通語

ヤノアサッテとシアサッテ

明日の次の日を「あさって」というのに対して明後日の次の日は東日本と西日本で異なります。

東日本…ヤノアサッテ

西日本…シアサッテ

ただし、東日本でも東京は西日本と同じ「シアサッテ」を使っています。

江戸時代の初めは、東京（当時は江戸）でも明後日の次の日を「ヤノアサッテ」と言っていました。江戸が日本の政治や経済の中心となり、江戸と上方（京都や大阪）との交流が盛んになるにつれて、西の方言であった「シアサッテ」が使われるようになりました。

3. 波紋のように広がったことば

方言の分布を全国でみると、一つの地方だけあると思っていた言葉が遠く離れた別の地方にもあるということがあります。

例として、虫の「とんぼ」があります。

岩手県、宮崎県、山形県などでは、「アケズ」「アッケ」などと呼んでいます。

日本の中央部では「トンボ」ですが、九州の南部から沖縄にかけては、「アケズ」「アケージュ」などがみられます。

つまり「とんぼ」の方言は、『アケズートンボーアケズ』という形で分布していることとなります。

このような分布の模様を「圏分布」と言います。

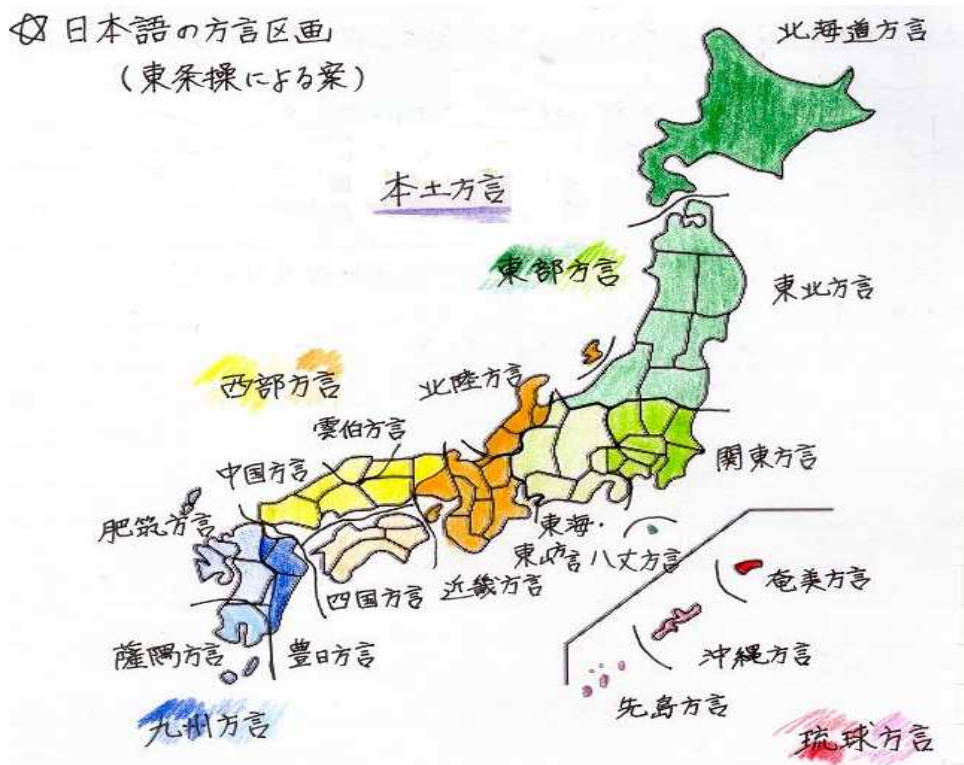
4. 日本の方言区画

地域の中に言葉の違いが見られるとき、その境目となるところを「ことばの境界線」と言います。またこのような境界線で方言を分けしたときにそれぞれの方言が使われている地域を方言区画と言います。

この研究を初めにしたのは、東条操（とうじょうみさお）という人で、大正時代から昭和時代にかけて全国の方言を集め、「方言区画」とよばれる方言の分類についての研究をおこないました。

以下は東条氏の研究に基づいたものです。

☆ 日本語の方言区画
(東条操による案)



(1) 東部方言<本土方言>

東部方言は五つの方言にわけられます。

東部方言の全体的な特色は、「行カナイ」のように打ち消しをあらわすときに「ナイ」を使うこと、「イー天気ダ」のように断定をあらわすときに「ダ」を使うことです。

① 北海道方言

北海道方言の大部分は、明治時代に全国各地から移住してきた人々が、それぞれの方言を持ち込み、それらの一部が取り入れられてできたものです。他の地方に比べて共通語化も進んでいます。

② 東北方言

東北方言の特色として、まず発音の面で「ツ」と「ス」、「ジ」と「ズ」、「チ」と「ツ」を区別しないことがあげられます。

(例)「乳」と「土」…「ツズ」

「地図」と「知事」…「ツンズ」

そのため東北方言は、「ズーズー弁」とよばれています。

また「ツグエ」(机)や「カダ」(肩)のように、語の中の「カキクケコ」「タチツテト」が、濁音になるのも大きな特色です。

③ 関東方言

関東方言は、一部の地域で東北方言と東京方言を含んでおり、共通語の元になっている方言です。

関東方言の最も大きな特色は、「読もう」と言うときに、「読ムベー」「読ムPPER」などと「ベー」や「ペー」を使うことです。

東京の都心部を除く関東全域にみられ、「ベーベーことば」とよばれています。

④ 東海・東山方言

東海・東山方言は、東部方言と西部方言の境界地帯で、二つの方言が入り混じっています。

⑤ 八丈方言

八丈方言は、他の地域にはみられない独特の方言をもっていて、奈良時代の「東国方言」の特徴を残すものです。

(2) 西部方言<本土方言>

西部方言は五つの方言に分けられます。

西部方言の全体的な特色は、「行カン」(行かない)のように打ち消しをあらわすときに「ン」を使うこと、「エー天気ヤ」「エー天気ジャ」(いい天気だ)のように断定をあらわすときに「ヤ」や「ジャ」を使うことです。

① 北陸方言

北陸方言では、文法の面で近畿方言と共通する特色が多くみられますが、一部に東北方言や東海・東山方言とよく似た特色も見られます。

② 近畿方言

近畿方言の代表は、かつては日本の中央語であった京都と大阪の方言です。近畿方言の全域で東京式アクセントとは異なる京都・大阪式アクセントが使われています。

例えば、ご飯を食べる時に使う「はし」は、東京では「ハシ」(ハが高く発音)ですが、京都、大阪では「ハシ」となります。

また、川にかかる「橋」はそれぞれ逆になります。

③ 中国方言

中国方言は、アクセントが東京式アクセントとなります。

④ 雲伯方言

雲伯方言は、「ズーズー弁」であることなど、発音の面で東北方言と共通の特色をもっています。

⑤ 四国方言

四国方言は、近畿方言に通じる特色と中国方言に通じる特色をあわせもっています。

(3) 九州方言<本土方言>

九州方言は三つの方言に分かれます。

九州方言には、打ち消しの時に「ン」を使うなど、西部方言と共通する特色がみられます。それと同時に文法、発音、単語のいろいろな面で、日本語の古い姿を残している点に特色がみられます。

① 豊日方言

豊日方言は、「起クル」（起きる）、「開クル」（開ける）のような古い二段活用の動詞が残っていることなどに特色がみられます。

② 肥筑方言

肥筑方言は、「赤カ」（赤い）、「寒カ」（寒い）のように「カ」となり、形容詞の語尾の形に古い日本語の姿が残されています。

③ 薩隅方言

薩隅方言は、発音に特徴があり、母音の「イ」「ウ」で終わる単語の最後が促音（つまる音）になります。

例えば、「首」「口」「靴」はどれも「クッ」と発音されます。また丁寧表現として「モス」「ゴザンス」「ゴワス」などがあります。

(4) 琉球方言

琉球方言は三つの方言にわかれている昔、琉球王国があった地域の言葉です。

奄美方言、沖縄方言、先島方言はたがいに大きく異なっていて、言葉が全く通じません。

5. 共通語と標準語

1950年頃までは、共通語を話せる人はそれほど多くいませんでした。しかし、テレビの普及により共通語が広がり今では、若者からお年寄りまで方言と共通語をうまく使い分けています。

共通語と意味が似ている言葉に標準語があります。共通語と標準語は、同じ意味で使われていることもあります。違ふ意味で使われる場合もあります。標準語は、多くの人が「標準とすべき正しい日本語」と認めている言葉です。共通語は、東京生まれの人が「話し言葉」として使っているもののことです。「書き言葉」として正しい表現を「標準語」として共通語と区別することがあります。

III 結論

方言には、共通語では表現できない微妙な意味や言葉がたくさんあります。青森県などで使われている「アズマシー」という言葉は、風呂に入った時などのゆったりとした気持ちを表す方言ですが、この気持ちを共通語で表現することはできません。昔は、方言は「直さなければならないもの」とされていて、地方によっては学校で方言を使うと「方言札」といって方言を使ったことを反省する札を首にかけさせられることもありましたが。しかし、共通語が広がり消えていく方言も多くみられる現在では、方言の価値を見直し、方言を大切にしようとする人が増えています。方言は自分の気持ちを表現できる、なくてはならないものです。方言には歴史的な面もあり、昔から受け継がれてきた日本の文化を残すために必要なものの一つになると思います。日本だけでなく、外国にも方言は存在しているので方言は、世界的にも大切にしていけるべきである文化の一つだと思いました。

参考文献

『方言ポプラディア情報館』 ポプラ社

『日本の方言大研究6 なるほど方言学入門』 ポプラ社

『方言は気持ちを伝える 岩波ジュニア新書 555』 岩波新書 真田信治